

ヒット曲の性質（調性、テンポ）は新たな経済指標となりうるか？

（昭和と平成におけるヒット曲＝流行歌の調性、テンポと経済状況の関係、マクロ経済と社会心理の関係についての一考察）

一橋大学

保原伸弘

ベートーベンの交響曲において、その題名どおり、「英雄的」な広がりをもつ、第3番の「英雄」作品55には変ホ長調という調性が用いられる。J.S.Bach（大バツハ）とも親交のあったMattheson(1739)をはじめとする、音楽学（調性性格論）の立場からは、この変ホ調性という選択はもともと「英雄的」な広がりをおぼわすのにふさわしいとされ、「英雄」作品55における調性の選択は「偶然」ではないとされる。確かに、同じ作曲家の同様に雄大さを表現しうる、ピアノ協奏曲第5番「皇帝」作品73にも変ホ長調の調性が用いられ、また時代は越え、20世紀におけるR・シュトラウスの「英雄の生涯」作品40にも同じ変ホ長調が用いられる。このように、調性にはそれぞれ性格があり、楽曲のもつ性格にふさわしい調性が存在すると考えられる。

日本のヒット曲（≒流行歌）も西洋音楽の流れを組む以上、それぞれの楽曲は基本的に調性をもつ。本稿では、昭和30年代の高度成長期から平成期にいたる各年度のヒット曲計として選択された楽曲計数千曲のテンポや調性を逐次調べた上で、調性（#系か♭系かおよび短調か長調か）をはじめとした昭和期と平成期の日本のヒット曲（≒流行歌）の性質（テンポも含む）と実際の経済状況（経済成長、景気動向）との間に有意な相関が見られることを報告するものである。

すなわち、各年度のヒット曲のテンポの平均には上限があり、オイルショックまでは高度成長の勢いにおいてそれは上昇するが、オイルショック後は下降に転ずるとことがわかった。また、音楽学（調性性格論）では、#系の楽曲は躍動的な楽曲にふさわしく、♭系の楽曲は柔和な楽曲にふさわしいと主張するが、景気動向指数（DI）の高い年度には相対的に#系の楽曲が多く流行り、それが低い年度には相対的に♭系の楽曲が多く流行ることがわかった。さらに、各年度の#と♭の合計数は、ヒット曲の性質を通じてみられる、経済に対する感じ方の多様性と考えられるが、テンポとは対照的にオイルショックまでは減少するが、オイルショック後は増加することがわかった。

しかし、ヒット曲の調性と経済状況（DI）とは順当な相関がばかしくなく、昭和62年の平成への改元前の年度ではDIがまだ高いにもかかわらず、異常に♭系の楽曲が増え、またイラク戦争開戦前の平成10年ではDIがそう高くないにもかかわらず、#系の楽曲が異常に増える。（♭系の曲が多い昭和期において、太平洋戦争前は#系の楽曲が多い。）

マクロ経済と社会心理の関係はその重要性にもかかわらず、社会心理の扱いづらさ（計測性の問題など）から、これまで、経済学者には本格的に取り上げてこなかったと考える。しかし、米国ではすでにR.ShillerやG.Akerlofらがこの問題に取り組もうとしている。ヒット曲も経済成員の社会心理を描写する格好の標本である以上、本稿の研究はマクロ経済と社会心理の関係についての一展望を与えるものとする。